

# 市民が心理学に期待すること

## — 心理学者とのギャップとその解消 —

楠見 孝（京都大学大学院教育学研究科）

### 1 はじめに

市民が、心理学に対してもつ幻想は、市民の心理学への期待を反映している。市民の多くは、自分の性格や生き方を改善したり、人間関係の問題を解決することに関心があり、心理学にその手がかりを求めている。書店にはこうした問題をテーマにした一般向けの心理学の本が並んでいる。

一方、心理学者は、科学としての心理学を志向し、こうした市民の期待とは異なる基礎研究も行っている。そして、心理学者は、知識をもたない市民に、科学としての心理学を伝えることが大切だと考えている（欠如モデル）。しかし、市民は、科学としての心理学を知らなくても、経験に基づいて人の心や社会に関する素人理論（naïve theory）を獲得していて、深い叡智や洞察をもつ人もいる。したがって、心理学者は、市民が経験に基づいて形成したローカルな心理学の知識を踏まえた上で、科学的知識を提供することが重要である。そのことが、人生の適切な問題解決のためのアドバイスに役立つと考える（楠見, 2013）。

そこで、本発表では、日本心理学会教育研究委員会調査小委員会が、2011 年に全国の 20-60 代の 2,107 人の市民を対象に行った調査（楠見, 2015）に基づいて、市民の心理学に関する知識や理解（心理学リテラシー）の現状を把握し、市民が心理学に何を求めているか（ニーズ）を探る。そして、市民と心理学者のギャップを埋める方策を検討する。

### 2 市民のもつ心理学の知識

第 1 に、18 トピック（性格、記憶、教育、発達、犯罪など）の心理学知識について、知識の程度の自己評価を 5 段階（5:よく知っている～1:全く知らない）で求めた。その結果、各トピックで「知っている」と「よく知っている」と答える人の割合は 1-2 割であった。「知っている」回答が多い項目は、[マスコミが人に及ぼす影響]、[ストレスや自殺などの原因や防止]、[対人場面に関する知識]であった。さらに、これらの知識の情報源を尋ねたところ、[対人場面]に関しては自分の経験、[マスコミの影響]や[ストレス]、[脳]や[心理トリック]についてはテレビから得ている人が多かった。

第 2 に、心理学知識テスト（例：血液型で性格がわかる等の正誤問題）の結果は、大学で心理学の授業を受講した経験が、正答率を高めていた。人生経験（年齢）や

マスコミ・本など日常的なメディアからの心理学への接触だけでは限界があった。

### 3 市民の心理学への知識ニーズ

市民が心理学に関してどのようなことを知りたいと考えているのか、先と同じ 18 トピックについて、5 段階評価（5:もっと知りたい～1:知りたいと思わない）を求めた。その結果、仕事に役立つ情報へのニーズが高く、[プレゼン、営業などでの対応方法]、[他者の気持ちを表情や動作で見破る方法]、[集団における人間関係とその改善のための情報]、[ストレスなどの対処法]は 6 割以上が「もっと知りたい」「知りたい」と回答していた。一方、[心理学における実験や調査、観察、心理テスト、統計の方法]というアカデミックな心理学については 1 割と少なかった。

さらに、心理学に関してどのようなトピックが社会にとって重要だと考えているのか、同じ 18 のトピックについて、5 段階評価（5:重要である～1:重要でない）を求めた。その結果、[ストレス、心の病気]、[対人関係]と[犯罪と非行]は 3 割以上が重要と評価した。そして、[心と身体の関係]、[社会の対立、偏見]、[教育、学校]、[性格]、[産業・組織]が 2-3 割でつづいた。これらは、個人のメンタルヘルスや社会的問題解決のために、重視されたと考えられる。一方、[脳の仕組みと働き]、[発達]、[記憶と思考]、[リスク心理学]、[感情と意欲]が 2 割前後で、「動物の行動と能力」、[心理学研究法]などのテーマは、学問としては重要ではあるが、社会的に重要であるとする比率は 1 割であり、その重要性は市民には判断しにくかったと考える。

### 4 市民の科学観と心理学観

市民が、科学と心理学のそれぞれについて、有用性や身近さをどのように捉えているかに関する 16 項目について、5 段階（5:全くそう思う～1:全くそう思わない）で評価を求めた。その結果、「心理学は社会にとって有用」（全くそう思う＋そう思う：81%）は、「科学は世界にとって有用」（87%）よりもやや低い。心理学は科学と同様に 8 割以上が有用と捉えていた。また、心理学と科学それぞれについての 2 つの質問「知識を得るのは楽しい」（心理学 70%, 科学 69%）と「私にとって身近なものである」（心理学 41%, 科学 48%）は、同等の評価であった。このように、心理学は科学と同程度の有用性や身近さの評価がされていた。

## 5 市民のもつ心理学のイメージ

「心理学とはどんな学問だと思いますか」、「心理学の研究が進みことによって、どのようなことがわかると思いますか」という問いについて自由記述を求めた。その結果、心理学の学習経験のない市民は、心理学を「相手の深層心理を探り大切な部分を引き出せる」、「人の深層心理から行動や考えを考察する」学問と捉えることによって、「心理状態を読み取り危険回避」をしたり、「個々に応じた人材育成や犯罪予防、いじめの解消」ができると考えていた。また、教養心理学の学習経験のある市民であっても、「特別な人が学ぶイメージ」があり、人々の行動の裏を読み、事件を未然に防ぐことを予想していた。

## 6 市民と心理学者とのギャップとその解消

市民対象の調査の結果、市民と専門家の知識のギャップが少ない部分は、対人関係などの領域で、経験に基づく知識が心理学と一部対応している。したがって、市民のもつ実践知を理論的に裏づけたり、実践知に基づいて理論を構築することが考えられる。

一方、市民と専門家の知識のギャップが大きい部分は、脳、発達、思考などの領域である。ポピュラー心理学の内容が、間違っているケース、経験からの内省が難しいケース、市民が関心をもっていないケースがある。これらの領域については、誤りを修正したり、知識を補完したりする教育や情報発信が必要である。

人は経験やテレビや本に基づいて学習し、人の心についての知識をもつ「常識心理学者」ではあるが、その知識には限界がある。そこで、図 1 に示すように、市民のもつ日常生活に基づく実践知と心理学者がもつ学問知に基づく心理学の知識と方法論を融合することによって、市民における叡智としての心理学リテラシーを育成することが重要である。

ここでは、叡智を人生経験に基づく深く広い知識と理解に支えられた知性であり、人生で遭遇する困難な問題を解決するためのものであると捉える。そして、叡智の要素を、Baltes & Smith(2006) に基づいて次のように考えた。基礎知識としては、人生に関する[事実知識]

(例:人の性格や人生の出来事)と[方略知識](例:人間関係、人生の目標を達成する方法)がある。これらの知識のメタ的な知識として、生活に関わる状況によって変化する[文脈知識]、価値観や人生の目標などが人によって異なるという[相対主義]、そして、人生の[不確定性]に関する知識がある。

さらに、批判的思考が、内省を通して、メタ的な知識を事実知識や方略知識に適用させる働きをもつ。

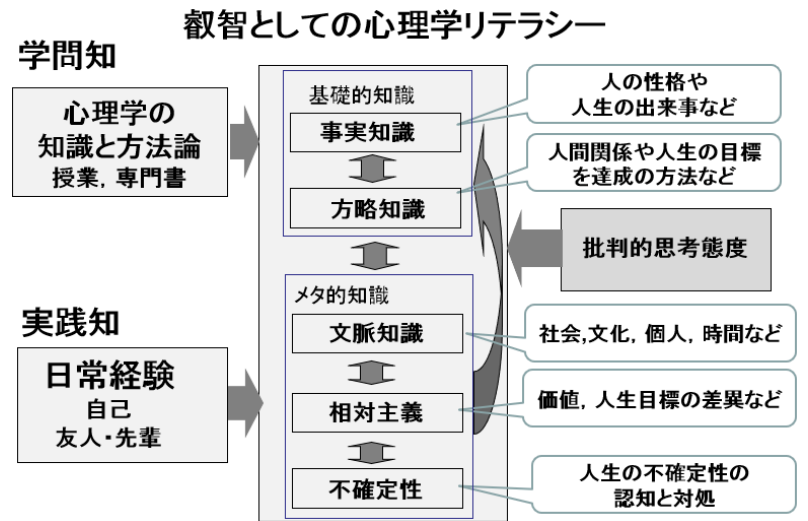


図 1 叡智としての心理学リテラシーの育成

このようにして経験を土台にした実践知と心理学の学問知が結びついたものが「叡智としての心理学リテラシー」である。それは、日常生活を適切に読み解き、行動することによって、よりよく生きるための能力である（楠見、2013）。そして、市民の心理学リテラシーを育てることが、心理学者の役割であると考えられる。

## 7 まとめ

市民の心理学リテラシーを育成するために、心理学者が市民に伝えるべきことは、以下の 3 つがある。

第 1 は、市民が日常経験の中で蓄積した常識心理学の中で、学問的に意義のあるすぐれた実践知に、焦点をあて、科学的に検証して、その重要性を伝えることである。

第 2 は、常識心理学を土台にしてその中の学問的な誤りを修正したり、よりよく生きていくために重要な知識を補完したりするための学問知に基づく心理学教育や情報発信をおこなうことである。

第 3 は、学校教育において、学問的な心理学の重要な事柄を系統的に教えることである。高等学校の新学習指導要領においては、科目「倫理」において心理学の内容が拡充される動きがある。心理学者が高校教員に対して、学問的な心理学の知識を生徒に伝えることができるように支援することによって、教育の効果はより大きくなると考える。

## 引用文献

- Baltes, P. B. & Smith, J. (2008). The fascination of wisdom: Its nature, ontogeny, and function. *Perspectives on Psychological Science*, 3(1), 56-64.
- 楠見 孝 (2013). 心理学とサイエンスコミュニケーション 日本サイエンスコミュニケーション協会誌、2(1), 66-80.
- 楠見 孝 (編) (2018). 心理学って何だろうか? : 4000 人の調査から見える期待と現実 誠信書房